





Blind

「……ルールは、昔と同じでいいかな」

「それでいい。何でもあり。降参するか、立てなくなつた方が負け」

「シロコちゃん、降参したことあつたっけ」

「ん、ない。今日もしない」

向かい合い、銃を向け合う。

高まる集中と、高ぶる神経。周囲の音が聞こえなくなるほどの一瞬。

「じゃあ、行こうか？」

濡れたコンクリートを、靴裏が噛む。

二人の間を、火花が散る。



IRON

——ホシノ、勝負しよ。この前より強くなった。今日こそ負けない。

ふと思い出す、懐かしい声。それは数年前、ホシノがシロコを拾ったばかりのころの記憶だ。

今よりずっと小さかったシロコは、よく自分に勝負を挑んできた。でもそれは、いつだって勝つことで何かを得るためのものではなくて。

頑張ったから見てほしい。強くなりたいから教えてほしい。考えがあるから聞いてほしい。

あの勝負の数々は、そんな対話の意味がある時間だった。（そっか。何かが欲しいわけじゃなくて——）

撃ち込まれた散弾を振り払い、傷を増やしながらもシロコは向けられたショットガンの銃身に手を伸ばす。

主力武装を取り上げ、自分と対等な位置まで引きずり下ろす。そんな相手の狙いを視線の動きで察知したホシノは、グリップを握った右腕を引いてストックを肩に乗せ、即座に交錯距離に対応。

（——この子は、私に何かを伝えたいんだ）

引き金に触れた人差し指に、わずかに力を入れる。外しようなない間合いだ。これで勝負がつくことはないが、シロコにとっては大きな痛手になる。

